

教材・視聴覚媒体の活用

1 教科書の選定

適切な教科書

授業の内容に合った教科書は、学生の学修理解を助け、また、授業をスムーズに進行させる効果があります。教科書によっては用語の定義などが異なるものもあるので、自分の考えと異なっていないかどうかを選定前に熟考する必要があります。

適当な教科書が見つからない場合は、プリントや画像等による教材を自分で作成することが望ましいでしょう。

教科書の有効な利用

教科書に記載してある不変的な内容に関しては、絶対的な価値があります。つまり、どの教科書の第何版の何ページに記載してある、という引用もできます。

しかし、教科書に記載してある内容が古くなっていることも少なくありません。学問は日々進歩しています。教科書の利点・欠点を理解して選定することが重要です。

2 プリント教材の作成

利点と注意点

プリントは、授業の進行に合わせて内容を選び、自分のペースで作成することが可能です。配布資料は教科書とは異なり、最新の内容を教員の授業教材として利用できることが、最大の利点です。また、教科書に記載されていないような内容の紹介も可能です。

ただし、往々にして授業当日が迫ってから作成しがちで、他者のチェックが行われないことがあります。誤字・脱字や思い込みによる記述を見逃さないよう注意が必要です。また、プリントには、学生が書き込めるよう、十分な余白を設けておくといでしょう。

通常、書籍や雑誌は、著作権、著作隣接権の対象となりますが、授業の資料として使用する場合には、この対象から外れます（教育目的利用の例外規定）。

3 パソコンの活用

プレゼンテーションソフトによる教材の提示

プレゼンテーションソフトウェアを利用した視覚からの情報は、より強く、より鮮明な印象が残るとされています。短時間で有効な授業を行うために、視覚教材は教育現場によく取り入れられています。スライド作成時には、フォントの選択、行数、画像の利用・配置、背景の色等を、見やすく、かつ印象に残るようにする必要があります。さらに、スライドを見せながら、その画面が印象に残るような説明も重要です。板書とスライドをうまく使い分けると効果的でしょう。

4 視覚・聴覚媒体の活用

ウェブ講義のメリット

対面講義と比較し、良い点を紹介します。

1. 学習時間に関する利点

- 自由に聞き返し、考える時間がある。納得して進められる。
- 一時停止できるので、講義についていけないということがない。
- 何度も聞けるので聞き逃しがない。反復学習ができる。
- いつでも、どこでも受けられて、研究との都合がつくので、時間が有効に使える。

2. パソコンを用いることの利点

- 図や字がきれいで見やすいので理解しやすい。
- 事前に内容がよく整理されており、図や式が整った形で提供されるので理解しやすい。
- ノートを取らないので講義に集中できる。
- 移動時間、移動経費、宿泊費などの間接費が不要になる。
- 理解度の測定が容易になる。(理解度チェック等を利用)
- 基礎学習から専門学習までの時間を短縮できる。

映像、音楽、電子的製作物は、通常の授業で使用するだけであれば、使用許諾を申請する必要は原則としてありません（教育目的利用の例外規定）。ただし、無制限に許可されているものではなく、あくまでも教室内で行う授業に関してのみで、不法に販売物をコピーしたり、インストールしたりすることはできません。

5 他の学習方法の活用

一般に学習方法は、(1) 受動的方法、(2) 能動的方法に分けられます。(1) には講義、見学、映画やビデオ放映などがあり、(2) には実務研修 (On-the-job training)、シミュレーション実習^{*}、小グループワーク、自習などがあります。

シミュレーション実習

模擬器具・機器（モデル／シミュレーター）を用いた実習。基本的なものからパソコンによるバーチャルなものまである。

コミュニケーションと学修成果の確認が要

eラーニングは、情報技術を使用して行う遠隔学修のことです。インターネットを利用し、パソコンや携帯端末を用いて、同期もしくは非同期双方向で授業を行い、面接授業と同等の効果を上げるものをいいます。

日本大学では通信教育部において展開し、1章あたり90～120分程度の視聴学習を目安として、1ないし2単位を付与しています。大学設置基準上、通学課程では卒業に必要な124単位のうち60単位までを、通信教育課程（通信教育部）では卒業に必要な単位の全てを、インターネットを利用して修得することが可能です。

eラーニングによる学修には双方向性が必要です。LMS（Learning Management System）を使用して、学生の学修履歴や学修の進捗状況を管理するのはもちろん、教員と学生または学生同士のコミュニケーションが可能な環境を整備します。また、学修効果を測定するため、科目別に学修成果（ラーニング・アウトカム）を設定し、学生自身が自己点検するとともに、教員が緻密な理解度チェックを行う必要があります。

eラーニングによる学修方法は、特に自ら主体的に学ぶ姿勢が問われます。また、学修の方法や進度もまずは学生自らが把握し、当該授業科目やプログラムに設定されたラーニング・アウトカムと対

峙して自己管理することが求められます。この学修プロセスを通じて「学び方を学ぶ」ことができ、“自主創造型パーソン”としての気風を養えます。

eラーニングで得た知識を授業でアウトプット

“自主創造”型の学修方法で学んだ知識を定着させるために不可欠なのは、その知識を実際に活用（アウトプット）することです。近年、アメリカの教育機関で注目されている「反転授業（flipped classroom）」の概念を用いて、従来、大学の教室で展開されている「講義」をeラーニングにより自宅等で学修し、実際の教室では、すでに学修した知識を基に、グループワークやディスカッションなどのアクティブ・ラーニングの手法によってアウトプットするという授業の進め方があります。本学では、平成27（2015）年度より全学共通初年次教育科目「自主創造の基礎1」に、この反転授業の手法を取り入れています。

単に知識を修得するにとどまらず、他者とのアカデミックな交流を通じて表現し合うことが、真の“自主創造型パーソン”の育成に寄与すると考えられます。ラーニング・アウトカムを達成させるため、教育ICTの進化とともに、eラーニングを活用した学修・教授方法を模索し、展開することも求められているといえます。（通信教育部教授 関根二三夫、学務部学務課）